

初めて知った当たり前

小 五

先日、初めて都電あら川線に乗った。路面電車に初めて乗ることになったので、出発からわくわくしていた。母と二人で乗ることになった。

小さな路面電車は、ふだんの生活で使われているらしく、買い物ぶくろを持ったお年寄りや、小さな子どもを連れのお母さんもいた。

始発の三ノ輪橋から、ぼくたちは乗りこんだ。車内の座席はすぐに満席になったが、ぼくと母は座ることができた。そのときぼくはつかれていたもので、
「よかった、これで休めるぞ。」

と思った。

二つほど過ぎると、お年寄りが数人乗ってきたので、とっさに、ぼくと母は席をゆずった。少し残念な気持ちになったが、車内の様子から見ても、席をゆずるのは当たり前だと感じた。

いくつか過ぎると車内は、身動きがとれないほどの満員になった。つかまる場所もなく電車がゆれるたび立っているお年寄りが転びそうで、ぼくは少しこわくなった。

ある停留場で、二本の松葉づえをついたお兄さんが乗ってきた。すると、ぼくが席をゆずったおじいさんが、そのお兄さんに向かって、

「どうぞ、座って。」

と言って、その席から立ち上がった。
車内を見回すと、さつきまで座っていた

人が立っていたり、手すりや立つ場所までもゆずり合っていたりして、ぼくはとてもおどろいた。

あら川遊園地前では、たくさんの親子が乗ってきた。みんな満員電車で立ったままだ。しばらくすると、小さな女の子がぐずり始めた。

最初は小さな声で泣いていたが、何分かすると車内中にひびくような大きな声で泣き出した。ぼくが気になって後ろを向くと、近くにいたおばあさんと目が合った。おばあさんは「小さい子だから仕方ないよね。」と、やさしい声で言ったので、ぼくも笑顔でうなずいた。

ぼくの前に座っていた松葉づえのお兄さんが、おりる準備をし始めた。電車が停車すると、周りの人が自然と通路を開け始

めた。ぼくからはお兄さんのすがたは見えなくなったが、後ろの方で、「まだおりていません。」

と女の人の声が聞こえてきた。ぼくは温かい気持ちになった。

電車の中は、暑くていい場所ではなかったが、ぼくはいやな気持ちにはならなかった。それは、みんなの思いやりがあったからだ。

人にやさしくすることは、特別なことで意識してやるものだと思っていたけれど、電車で会った人たちは、みんな自然に当たり前のこととしてやっていた。相手のことを思いやって行動すると、意識しなくても人にやさしくできることをぼくは知った。

ぼくは、あこがれていた都電あら川線がもっと好きになった。ぼくも、ここで知った当たり前ができるようにしたい。